

大学生ケアラーの 精神的健康とキャリア意識

国際文化研究科 国際文化専攻
臨床心理学研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

大森 朱寧

主査 藤吉 晴美 副査 樋渡 考徳 中富 尚宏

研究背景

日本では諸外国に後れを取っているものの、家族の介護や日常生活の世話を過度に行っている18歳未満のケアラーであるヤングケアラーに関する研究は、2010年に日本ケアラー連盟が設立されて以降、着々と進められている(日本ケアラー連盟, 2015; 宮川ら, 2022; 藤田ら, 2022; 黒澤, 2023; 奥田ら, 2023)。

しかし、18歳からおおむね30歳代までのケアラーである若者ケアラーの中でも、特に大学に通っている若者ケアラーである大学生ケアラーに関する研究は、ほとんど行われていない(馬場, 2022)。

研究目的

大学生ケアラーは、将来的な人生設計、特に職業選択において複雑な葛藤を抱えることが考えられる。

しかし、大学生ケアラーの先行研究は、国立大学生を対象としたもののみであり(馬場, 2022)、大学生ケアラーの現状を知るためには、対象を私立大学に通う大学生にまで拡大する必要がある。

そこで本研究では、私立大学に通う大学生ケアラーの実態について調査し、さらにケアが彼らの精神的健康やキャリア意識に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

研究概要

調査期間: 2024年9月から10月

調査対象: A大学(私立大学)に通う大学生431名のうち、430名(平均年齢: 19.39±1.17歳、性別: 男性162名、女性264名、その他4名)を分析対象とした

調査手続き: グーグルフォームを利用したオンライン調査

調査内容: フェイスシート、ケア役割に関する項目(藤田ら, 2021; 馬場, 2022; 日本ケアラー連盟)、精神的健康に関する項目(古川ら, 2003)、キャリア意識に関する項目(安達, 2004)、自由記述、インタビュー調査

研究結果: 分析対象者430名のうち、現在家族のケアをしている者(現在ケア群)が20名(4.7%)、過去にケアをしていた者(過去ケア群)が25名(5.8%)、ケア経験のない者(ケア経験なし群)が385名であることが分かった。ケア経験の有無と精神的健康との関連を調べたところ、現在ケア群は、ケア経験なし群及び過去ケア群と比較して、精神的健康状態が悪いことが示された。次に、ケア経験とキャリア意識との関連について、職業選択をするうえで家族が支障になっているかを調べたところ、ケア経験あり群は、ケア経験なし群の倍以上の割合の者が職業選択をするうえで家族が支障となっていると回答した。また、ケア経験と、自分の好きなこと・やりたいことを仕事にしたいという傾向との関連を調べたところ、過去ケア群と比較すると現在ケア群の方がその志向が強いことが明らかとなった。

大学生ケアラーへの支援に関することとして、ケア経験あり群から「相談しづらい」という意見があり、支援の受けにくさが明らかとなった。また、ケア経験なし群から「身近にいても気づきにくい」という意見があり、大学生ケアラーの発見の難しさが浮き彫りとなった。大学生ケアラーについて、ケア経験なし群で「よく知らない」という意見が多くあり、認知度の低さが考えられた。黒澤(2023)も示しているように、大学生ケアラーについて、社会に向けて広く周知させることが支援の一歩となるであろう。

成果・まとめ

大学生のケア状況について、現在家族のケアをしている者の割合は、国立大学にて調査を行った馬場(2022)によって示された割合より、本私立大学における割合の方が多かった。

ケア経験と精神的健康との関連については、ケアが大学生ケアラーの精神的健康に悪い影響を与えていることが明らかとなった。

ケア経験とキャリア意識との関連については、過去に家族のケアをしていた者と比較して、現在家族のケアをしている者の方が自分の好きなこと・やりたいことを仕事にしたいという志向が強いことが明らかとなった。



指導教員コメント

本研究は、私立大学の大学生ケアラーの実態を把握する研究の端緒として貴重な結果を示した。

また、家族のケアが私立大学に通う大学生の精神的健康にマイナスの影響を与えているという結果も示した。さらに現在ケアをしている大学生は、職業選択において、自分の志向を重視することも明らかにした。質的分析結果を通して、大学生ケアラーの認知度を上げることが当該学生への適切な支援につながることも言及し、臨床心理学分野の研究として価値のある成果をもたらしたといえる。

藤吉 晴美